

ファミリー・サポートのためのスタッフ養成 — ライアソン大学における家庭支援職資格認定課程について —

福 川 須 美

The Certificate in Family Support at Ryerson
Politechnic University in Canada

Sumi FUKUKAWA

はじめに

— 保育職と子育て家庭支援の専門性をめぐって —

わが国の現在の保育者養成課程（保育士、幼稚園教諭ともに）では、幼児の集団保育・教育に関する専門知識・技術が主要な位置を占めており、卒業生の多くは実際に幼稚園や保育所、あるいは様々なその他の児童福祉施設に就職していく。

しかし、わが国においても、保育の現場では子どもに焦点をあてた保育のみでは間に合わず、家庭生活のあり方や親の子育てと保育所の保育方針とのギャップに悩む保育者は少なくない。保育者たちからは今時の親たちは子どもの発達段階や育児についての知識が無さ過ぎるという声が聞こえてくる。

わが国における保育者養成課程は子どもの保育の専門家ではあっても家族や親や地域社会への対応については素人である。もちろん保育は家庭との連携が必要不可欠であり、日常の保育では家庭との具体的な協力が行われてきた。保護者との信頼関係が強まれば、保育者に子どものことだけでなく、夫婦間の問題や家庭の悩みが打ち明けられたり、相談が持ち込まれたりすることは多い。保育者はいわば現実には迫られて、否応なく相談相手になり、問題解決に奔走したりせざるを得なかった。保育者が相談の窓口となり、他の専門機関につなぐ役目を果たすことも可能だが、そのようなネットワークは日常的には存在していないことが多かったといえよう。結局は自らの経験に基づく方法や地域の社会資源を利用する方法など、個人的な努力に負うことが多かった。もちろん賢明な対応もあり、努力に敬意を払うべきであるが、それはいわば経験的素人療法とも言える。エンゼルプラン後、保育所には地域子育て支援セ

ンターとしての役割・機能が期待されるようになり、子どもの保育のみならず、親の子育て支援を新たに引き受けることになった。周知のように保育政策に盛り込まれる以前から、保育園を地域に開き、地域の子育てセンターとしての役割を先進的に果してきた保育園もある。零歳児からの集団保育を実施するようになった保育園はたしかに保育の場として貴重な経験を積んできた。子育てセンターになるようにと期待されれば、その必要性を日々感じている保育者たちは、頷かざるを得ないだろう。従来から、保護者との対応にも経験がある。

その場合、保育者は親に対して指導的な立場、つまり保育の専門知識・技術を有している優位な立場からの助言者として、素人の親を教えるという構図が一般的であったといえよう。保育者が親に対して批判的態度を取ることも少なくなかった。

しかし、カナダの子育て家庭支援の現場を数多く見聞し、優れた実践家たちに出会った小出まみ氏は、このような保育者と親の一方的な関係は間違っていたと指摘する。子育て家庭支援職には保育職とは違う独自の専門性があるのではないか、その内容は何か、その仕事の手法の独自性はどこにあるのか、カナダではそれらがどのように位置づけられているのか等、同氏は新著で子育て家庭支援職の専門性をめぐって新たな考察を加えている。

ここ数年、私も小出氏らの調査研究に触発されてカナダに関心を持つようになったが、1998年および1999年の2回、同氏を代表とする共同研究の一環としてカナダのオンタリオ州トロント市にあるライアソン大学（Ryerson Politechnic University）を訪問した際、まだ創設間もない生涯教育学部

(Continuing Education Division) の家庭支援職資格 (Family Support Certificate) 認定課程の責任者リタ・ローゼン博士 (Dr. Rheta Rosen) をはじめ、マーサ・リー・ブリックステッド (Martha Lee Blickstead)、ジューン・ポラード (June Pollard) に会い、このコースの具体的な内容について質問することができた。

わが国においても、親の子育て支援が課題になっているという、リタもマーサも同感だと深く頷いた。カナダにおいても家族に接近する必要を切実に感じた現場の保育者たちが、この課程で専門知識と技術を身につけたいと希望することが多いという。

ライアソン大学の大学要覧や若干のテキスト・参考書等を入手したので、それらをもとに、既成の学問領域のどれにも属しないとされる、この新しい教育課程について紹介し、わが国にとっても今まさに課題である、子育て家庭支援のスタッフ養成に関する示唆を得たいと考える。

1. ラリアソン大学における家庭支援職資格認定課程の創設

この資格認定課程はライアソン大学により創設された。源流としてはファミリー・ライフ・エデュケーション (Family Life Education) とファミリー・リソース・プログラム (Family Resource Programs) の二つの流れがあり、地域でこれらに携わるグループからの要請に応じて発展してきた。「ファミリー・リソース・プログラムの理論と実践」のテキスト冒頭に記載されている創設の経緯は以下の通りである。

大学は1991年に生涯教育の一環としてファミリー・ライフ・エデュケーションの資格コースを開設した。地域に根ざすファミリー・ライフ・エデュケーターの養成である。

1991年にはメトロ・トロント・ファミリー・リソース・プログラム協会から大学に、ファミリー・リソース・プログラムで働くスタッフの資格認定課程を開設してほしいと要請があった。

1992年には、地域性、民族・文化的属性、広範囲にわたるプログラム形態、種々様々な公的研修や人生経験等の要素を含む、幅広いファミリー・リソース・プログラム団体から選ばれた代表者か

らなる資格認定課程諮問委員会が設置された。

1995年夏、生涯教育学部長は諮問委員会に対して、ファミリー・ライフ・エデュケーション資格のコーディネーターと協同して、二つの資格を統一するよう勧めた。

1995年秋、国、オンタリオ州およびメトロ・トロント協会からのファミリー・リソース・プログラムの公認のスタッフ養成計画の要請に応じて、ファミリー・ライフ・エデュケーション資格は家庭支援職という傘の下に、二つの潮流——ファミリー・ライフ・エデュケーションとファミリー・リソース・プログラム——を含むものに修正された。

1996年冬～夏、農村地域への展開とファミリー・リソース・プログラムの理論と実践が開発された。

1996秋～97年冬、家庭支援職資格認定課程発足：ファミリー・リソース・プログラム専門課程が学校の授業および遠隔地教育の形で開講された。課程開設3年後には60～70名の資格取得者を送り出している。

冒頭で紹介したライアソン大学の担当者によれば、この課程の設置に際しては次のような議論があったという。

その一つは、日本の保育士養成課程を念頭に置いて、高校卒直後の18～19歳の若年者は子どもには興味関心があるが、はたして家族問題に関心を持つだろうか、子育て支援や家庭支援を実際に行うには、それなりの人生経験や職場経験を積んでからの方が望ましいのではないかと、従って、大学入学直後からの養成では未熟すぎるという議論はなかったかと質問したことへの回答である。

われわれの質問に対して、リタたちは大きくうなづき、次のように述べた。たしかに、家族支援職コースは3年生からの専門課程にしようという意見もあった。しかし、歳をとれば興味が湧くというわけではない。ECE コース (保育者養成課程) の学生の場合、3年生からにすると、学生たちは子どもの発達や保育のみを先に学び、子どもの味方としての立場を確立してしまう。すると、現実には子育てに問題を持つ親たちを子どもたちの敵とみなしたり、蔑視したりする傾向に陥る恐れがあり、自分たちは子どもたちの救世主だということになりがちである。

親を攻撃したり、敵にまわすようでは、家庭支援職と子育ての主体である親との関係は好ましいものにはならない。子どもを子ども単独として捉えるのではなく、最初から親と家庭、地域のなかに生きる存在として認識することが重要である。1年もすれば、学生たちは充分理解するようになるという。高校卒業後に履修した学生のなかには、自分の進路に自信を持ち、さらに社会福祉系の学業を継続する者もいるとのことであった。かくて、学生たちは子どもと家族の問題を最初から統合した形で学ぶことになった。実際には家庭支援職コース履修者は、ECEコースの修了者、保育経験者など現場経験者が60%を占める。

次に「家庭支援」という場合、旧来の保守的なイデオロギーでいう家庭重視、つまり、女性の使命は良い家庭をつくることであり、家庭外の労働や社会参加よりも家事や子育てに専念するべきであるという意味での「家庭重視」「家庭第一」の主張と言葉の上で同じになるため、違いを理解してもらう必要があった。アメリカやカナダにおける新しい「家族の重視」「家族への回帰」は、そのような保守的な考え方への回帰ではなく、子どもの最良の発達にとって、家族の健全な状態、家庭生活のウェルビーイングが必須である点に注目した考え方である。ファミリー・リソース・プログラム課程の重要な参考書として挙げられているアメリカの文献の題名はまさに『家庭第一 (Putting Families First)』であるが、その文脈に位置づく家庭支援はかつての保守的な家庭重視とは似て非なるものであるといえる。

カナダの子ども家庭支援の施策には、子どもを家庭、学校、地域などの環境にくるまれた存在として把握し、支援の方向も、子どもを包みこむように、ラップアラウンド (Wrap Around) と称する方法が採用されるようになってきている。そのような方向と通底しているのであろう。

2. ライオンズ大学生涯教育学部の家庭支援職資格認定課程の紹介

(1) 課程の特徴

この課程は現職教育としての性格が強い。ファミリー・リソース・プログラムの履修者には、リソース・センターの現職者が仕事を継続しながら履修する例が多い。また、心理学、社会学、ソーシャルワ

ーク等の学部卒業者も相当数に昇るという。カナダ全土に普及してきたファミリー・リソース・センターは全国組織を持ち、この全国唯一のスタッフ養成課程に対して資金援助を行っている。同組織によって最近発表された全国のファミリー・リソース・センターのケーススタディは、すぐにこのコースのテキスト、必読書に指定されている。現場との連携、最新の情報に基づいて実際的な問題に取り組む姿勢が感じられる。

成人学生が多いこともあり、かれらの力量を引き出しながらの授業として、グループ学習方式が採用されている。教師は専ら推進者役を引受け、聞き役として、相談役として、参考資料の提供者として、学生の学習を支えていくファシリテーターである。リタ達も教育方法が従来の教師主導型のやり方とは違うことを強調していた。

教育課程の特徴は治療でもなく、カウンセリングでもない教育、つまり危機対応型ではなく、予防型であり、現実には教育効果が見えにくく、データで効果を証明することも困難な領域であるという。以下、同大学のコース紹介パンフレットや課程の年間計画(わが国の学生要覧に近いもの)、リタやマーサらとの面談に基づいて、同課程を紹介する。

(2) 家庭支援職資格認定課程の具体的内容 ファミリー・ライフ・エデュケーションとは

- ・家族生活のあらゆる様相に立ち向かう多面的、学際的な分野である。アプローチの方法は、治療や診断というよりは教育的予防的な方法である。
- ・ファミリー・ライフ・エデュケーターは急速に変化する社会にあって、個人および家族が生涯のあらゆる場面で、その生活の質を高めるように助力するための知識や技術を取得する。
- ・学習形態は、通常、グループ参加、グループ方式による体験的な学習である。

教育課程

- ・地域社会においてファミリー・ライフ・エデュケーション・プログラムを提供するために必要なグループリーダーシップとファシリテーター技術を学生に訓練する。
- ・文化的な差異のあるグループ、女性、経済的に不利な立場にある人、障害者のニーズに気づくセンスを磨く。必要に応じて、これらの人々の擁護者

として行動するためのスキルを提供する等、教育的な体験を与える。

- ・ファミリー・ライフ・エデュケーションの分野で地域社会のニーズにアクセスしたり、かれらのニーズに合わせてプログラムを計画したり、伝えたりするよう教育する。
- ・学生に学部水準の教科目を提供し、学生が学部水準の教育を継続して受けなければ、他の課程に転向することが可能である。

応募適格者

- ・男子学生でも女子学生でも多様な経歴——仕事、家族、地域、その他の人生経験——の持ち主
- ・地域サービス専門職の経験者・現職者
- ・自分自身や自分の家族についてもっと理解を深めたいと関心をもつ人々

ファミリー・リソース・プログラムとは

- ・地域で対応可能な範囲の、予防的なプログラムを提供し、家族やその他ケアギバー（保育ママ）たちの専門的役割を強め、力づける。
- ・これらのプログラムは、親教育、危機介入、家族カウンセリング、情報提供、地域サービスの照会やコーディネートを通じて近隣や地域社会を力づける。
- ・ファミリー・リソース・プログラムは障害児やその両親に玩具や道具の交換や助け合いグループなどの実際的な支援を提供する。

教育課程

- ・変動する家族や地域に全面的、生態学的、包含的、力動的な接近を継続する。それはコミュニティ・デベロップメントの展望の下に、サービスの健全なモデルを利用する。
- ・学生たちに、広範なファミリー・リソース・プログラムのなかで、効果的に働くために必要な知識や技術を提供する。
- ・すべての家族が、健全で家族にやさしい地域社会を築き、維持し、参加するために必要な支援を受けることを保障する考え方を奨励する。
- ・学生には現在の能力を基盤に始められるカリキュラムであり、さらに在籍学部レベルの学業を続けたいのであれば、他の課程に単位を移換することも許される。例えば「家族問題」の科目はECE(四年制保育者資格取得課程)の選択科目としても認

められている等、科目、単位の相互乗り入れがある。

- ・全国レベル、州レベル、地方レベルのファミリー・リソース・プログラム協会との前進的で協同的な関係を維持する。

応募適格者

- ・現在、ファミリー・リソース・プログラムや関連するコミュニティサービスで働く人々

教育課程の詳細

教育課程は8科目で構成されている。5科目は必須科目、3科目は選択科目である。

ファミリー・リソース・プログラムの教育課程に絞っていえば、以下の通りである。

・必修科目

家庭支援：家族問題Ⅰ

家庭支援：実習課題（以下の選択科目履修後、最終段階で履修）

家庭支援：ファミリー・リソース事業における理論と実践

・選択必修科目（以下の4科目のうち2科目選択）

家庭支援：グループ・ダイナミックスおよび対個人コミュニケーション（以前は個人または集団におけるリーダーシップ技術）

家庭支援：家族問題Ⅱ

家庭支援：事業内容の計画作成

家庭支援：農村地域における事業活動の展開

その他の選択科目は非常に広範な領域の科目からなるが、学生はコーディネーターとの個別相談によって選択する。選択科目は、幼児教育、家族研究、老年学、学際的研究、看護学、公開講座、哲学、心理学、ソーシャルワークおよび社会学に跨がっている。

家庭支援職の枠組みにおいては、幼児教育の学位の重要性を認識しており、大学認定機関の幼児教育学位保持者は、手続きを取れば、2科目既得と認定してもらえる。要覧に記されている選択科目は下記の通りである。

入学資格

- ・6科目のOAC単位か同等のレベルを有するOSSD(高等学校卒業証明書)か、関連職種2年以

・ 幼児教育	人間の発達Ⅰ、カリキュラム理論と応用、保育および教育展開システム、保育計画Ⅳ：障害児、保育計画Ⅴ：評価
・ 家族研究	カナダの家族：多様性と変化
・ 老年学	高齢化と保健、環境デザイン、高齢化と人間関係技術、能力および無能力化と高齢化
・ 学際的研究	保健とコミュニティ・デベロップメント、性交と出産
・ 非営利	非営利・ボランティア領域の理解、有効な非営利組織の開発
・ 公開講座	老年学：高齢化とあなた
・ 看護学	家族と保健
・ 哲学	教育哲学、理論と価値
・ 政治学	カナダ政治における権力と影響力、幼児教育政策の問題、行政管理の理論と実践Ⅰ、行政管理の理論と実践Ⅱ、オンタリオの地方政府と政策
・ 心理学	心理学入門、個別人間行動の心理学、社会心理学、死・臨終・肉親の死適応・ストレスと対処
・ ソーシャルワーク	民族的多様性と社会問題、ソーシャルワークと刑事裁判システム、多文化政策：比較文化と人種間政策と問題、家族支援政策、老年学：社会政策および老人の社会保障、ソーシャルワークと法律：子どもと家族、ジェンダーと性：ゲイとレスビアンの自己意識、家庭内暴力、老年学：高齢化入門
・ 社会学	社会とは、変動する世界におけるカナダ家族、女性・パワーと変化、いかに社会は機能しているか、社会階層と不平等、暴力と家族、教育社会学、薬・健康・社会、カナダ社会における人種と民族

上の経験のある成人学生
 ・ 面接による入学は現場経験のある学生についての
 み許される

(3) 履修の方法について

・ 学期制について——多様な編成
 9月入学であれば、9月～12月、1～4月半の
 2期制で、2年目は9月から開始。
 4カ月におよぶ夏休み期間は学生にとっては長期
 アルバイトの可能な月日でもある。

1月入学であれば、1月～4月半、4月半～8月
 半ばと休みなしの2期制で9月から2年目が始ま
 り、夏休みはほとんどない。

・ 夜間コースとして、週末と週日夜間を組み合わせる
 方法がある。現職者が仕事を継続しながら学ぶこ
 とができる。(パートタイム学生という)

例えば1科目について、土日の9時～17時と
 火・木の夜6時半～9時半を各2回というような
 集中的な構成で開講されるのである。(組合わせ方
 はいろいろである) この場合ちなみに1科目の授

業料は429カナダドル（日本円にして3万円～3.5万円）（1998年）とある。8科目を習得するには20数万円程度の授業料となる。

子持ちの夜間履修生は、大学附属保育園の夜間保育を利用できる。子どもたちの長時間保育を心配する声もあったが、子どもたちは子ども同士でいられる時間を楽しんでおり、帰りがたがらないことがあったり、保育園に行きたいと親にねだる子どももいたりするとのことである。実はこの保育園は全国一の優良施設でもある。

- ・遠隔地の学生の場合、通信教育も可能であり、広いカナダのどこからでもアプローチできるよう、インターネット等も駆使され、グループ・ダイナミックスの必要からテレカンファレンスで討論できるように工夫している。また、申請して地方の関連学科のある大学の科目を資格取得のための科目として認められることもできる。あるいは、トロント（ライアソン大学立地）に旅行してきて、春期1週間の集中講義に申込みこともできる。
- ・一科目は一般に週3時間の授業を13回（13週）、14週目は試験という構成であり、一週一回はホームワークが課されたり、読まねばならぬ図書や参考書も数多く、簡単に結論の出ない現実の問題について、グループで討論したり、レポートを提出したりと、相当ハードな学生生活である。
- ・資格取得には、前述のような8科目を平均2.00以上の成績で修了しなければならない。
- ・学生は資格取得を希望する場合、必要な科目の50%を修了する前に正式に履修登録しなければならない。他学科の科目の単位やライアソン大学で以前に取得した単位を最大限生かすには、最初に登録するよう勧められており、初期登録の利点や単位移換の詳細な規定がある。また、履修登録の時点で、どちらの専門を選択するか表明しなければならない。
- ・失業中や新規の職業機会を求めている再学習であれば目一杯科目を履修し、1年間で資格を取得することも不可能ではないが、相当厳しい学生生活になる。（カナダには失業者の職業訓練に対する補助があり、それを利用する学生もいる。）

職業継続しながらの資格取得は、通常2年～2年半はかかるとのことであった。実際にこの専門課程を履修する学生たちは、他の学部卒業者や、現在関

連する職業に就いている人々、再学習の機会を求める人々など、実に多様な背景を持っている。いわば人生経験や職場経験は豊富な人々であり、問題意識や目的も明確な人々といえよう。したがって単に教員が一方的に教授するような授業ではなく、それらを生かしていく教育方法が工夫されている。担当者は新しい教育方法として①自分の経験から始める、②教えられたことより参加したことが身に着く、③一方的に正しいことを教えることはしない（例えば中産階級が労働者階級に教え込むようなやり方ではない）、④なにがとも、すぐに評価的態度を採らない、というような点に留意しているという。

（4） 必修科目の具体的内容について

要覧には授業内容についての簡単な説明が記載されている。以下、各コースの必修科目についての解説を訳出する。

・グループダイナミックスと対個人コミュニケーション

この科目では、学生が自分自身のコミュニケーション能力と同時に自分と他人への気づきを高めることに焦点を当てている。経験的な方法で、広範囲な話題について、例えば、聞き取り応答スキル、応酬フィードバック、自己概念の向上、信頼の発展、適度な自己開示、コミュニケーション上の文化的影響などについて、語り合われるだろう。学生はまたグループ内の過程観察や分析、文献読書、宿題などにより、集団的過程の理論を理解し、集団的リーダーシップに関する自分のスキルや協同の促進力を獲得し始める。この科目で習得するスキルはファミリー・ライフ・エデュケーターにもファミリー・リソースの専門職にも必須である。

・家族問題Ⅰ（かつては家族ダイナミックスⅠであった）

この学際的な科目は、個人および家族の発達段階に関連する適切な理論、文献、問題を考察する。オリエンテーションが行われ、ファミリー・ライフ・エデュケーターにもファミリー・リソースのスタッフの仕事にも関連した実際の家族問題を扱う。扱う範囲は男女間の移り変わる曖昧な役割関係の結果として起こる個人や家族の経験するストレスは勿論、家族関係の文化的多様性、性的志向や多様な関係も含まれる。学生は地域のファミリー・リソース・セ

ンターやファミリー・ライフ・エデュケーション・プログラムの専門職と参加者との相互関係に学んだことを応用するだろう。

・事業内容の計画作成

この科目は学生に特定の地域のファミリー・ライフ・エデュケーション・プログラムやファミリー・リソース・プログラムのニーズに接近する知識と技術を提供することに焦点を絞っている。これらのニーズに合わせた適切な講座や事業の計画：例えばニーズ認定によって確認された個人的ニーズとしての裁縫技術、事業の履行と効果の評価。学生はファミリー・ライフ・エデュケーション・プログラムに参加した個人や家族を支援するために利用可能な地域の資源を熟知することになる。また、彼らは社会政策の指標に基づき、配慮の必要な（障害者認定）家族の擁護者として働く効果的な方法を学ぶだろう。

・家族問題II

この科目は集団的学習過程を目指しており、継続的で刺激的なファミリー・ライフ・エデュケーション・グループとして指導されるだろう。（学生はライフステージに起因する特定の問題のロールプレイをする。）学生により特定のグループのリーダーシップ役割を提供するためである。課題はファミリー・リソースのスタッフにとっても同様に関係がある。学生は科目担当講師と打合せて選んだ家族のライフステージのトピックに近い経験をしたグループのための計画と指導に責任を持つ。学生は同輩と講師による評価から、自分のリーダーシップスキルを洞察する力を得る。学期は以下のようなテーマに基づいて展開する。ペアレンティング、シングルライフ、共同生活、未婚、離婚、別居、再婚、混成家族、家族介護等。

・ファミリー・リソース・プログラムの理論と実践

この科目はファミリー・リソース・プログラムの原理、接近法の一般的入門課程である。生態学的な見方で、コミュニティ、他の諸機関、政府の政策の流れのなかで、家族や保育ママのニーズを吟味する。歴史的、比較法的接近はファミリー・リソース・プログラムの発展や現在の実践を吟味する方法である。

・農村地域における事業展開

この科目は農村地域独特の特徴、人口、政治構造、社会動態を吟味する。地域に根ざした事業計画によって、これらの特徴の持つ意味を探る。学生は原住

民コミュニティについての理解を深める。

・実習課題

学生は現場実習を経験するか、またはファミリー・リソース・プログラムやファミリー・ライフ・エデュケーション・プログラムに関する事業計画を展開する。実習場所は講師と相談して学生自身が選ぶ。学生の評価は講師と学生の継続的な協議に基づく。学生の実習に向けてのオリエンテーションとして一連の導入的な授業があり、また彼らの経験を他の学生と分かち合うためにまとめの授業がある。可能であればどこでも、学生は自分自身の個人的、職業的関心に関連する実習場所を選ぶ機会を与えられる。学生が実習前の科目で得た知識をこの実習に統合するよう意図しているのである。9月から12月に実施し(1998年)、学生はライアソン大学教員と地域の指導者の監督の下で実習する。

(5) テキストの内容から

入手したテキストは1998年秋期のファミリー・リソース・プログラムの理論と実践の授業に使用されたものである。授業の具体的な展開が示され、必読図書や参考図書、関連機関の所在地なども明示してある。前述したように、冒頭にはこの専門資格コースが開設された歴史的経緯について述べられており、次にこの科目の目的とするところや授業の進め方、学習の仕方、読書の必要性、教員との関係、各週単位の到達目標と評価に関する規定、剽窃防止、レポートの書き方等が示されている。

授業概説によれば、この科目は以下のように3つの単位 (MODULE) に分かれており、各単位はさらにいくつかの単位 (UNIT) に分かれている。

単位1. カナダにおけるファミリー・リソース・プログラムの概念化

単元の概要

単位1. カナダにおけるファミリー・リソース・プログラムの展開

単位2. ファミリー・リソース・プログラムの重要な特徴：相違面

単位3. ファミリー・リソース・プログラムの重要な特徴：共通面

単位4. ファミリー・リソース・プログラムにおける実践のガイドライン

単位5. 保育とファミリー・リソース・プロ

グラムの関係

単位6. ファミリー・リソース・プログラム における政策のインパクト

単位2. カナダにおけるファミリー・リソース・ プログラムの理論

単元の概要

単位1. ファミリー・リソース・プログラム における社会的支援

単位2. ファミリー・リソース・プログラム における成人教育と激励

単位3. コミュニティ・デベロップメントと ファミリー・リソース・プログラム

単位3. 理論と実践の調和

単元の概要

評価の記述

さらに詳細な内容については、別の機会に譲ることにして、一応課程の紹介を終わる。

3. カナダの家庭支援専門職の養成から学ぶこと

本稿ではカナダの家庭支援職の養成課程の創設、課程の内容などを紹介したが、わが国にとって示唆的な事項として以下の点を挙げておきたい。

- ①家庭支援職の養成課程の創設に当たって議論された、子どもを単独に、生物学的視点から捉えるのではなく、家庭、学校、地域など環境にくるまれた存在としていわば生態学的な視点で見ることの重要性。
- ②生態学的な視点から子どもを把握すると、その発達を保障するには、子どものみを単独に扱うのではなく、家庭、地域などの健全で良好な環境づくりが必須となる。家族が見直された背景には、このような接近方法の大転換がある。
- ③したがって、家庭支援職の養成においても、この視点が貫かれており、最初から子どもと家庭を切り離さずに学習し、支援者は親に代わって子どもを育てるのではなく、親を子育ての主体として尊重し、親自身、家庭自体の子育て力を増進するように働きかけることを原則としていく。
- ④深刻な問題を抱えた家族、危機的状況にある家族など、専門的な対応や解決方法が適切な場合の支援は問題対応型の専門家が必要であるが、危機に陥らないように予防的な支援を重視することが、この家庭支援職の養成目的である。

わが国においては今年3月、東京都社会福祉協議会の子育て相談員教育プログラム開発研究委員会の手で「子ども家庭相談員のための研修の考え方とモデル研修プログラム」が発行された。東京都の施策である子育てひろば（人口2万人に1ヵ所）と子ども家庭支援センター（人口10万人に1ヵ所）に勤務する職員等（各児童福祉施設及び事業に従事する職員で相談等に関わる者も含む）を「子ども家庭相談員」として、その現任研修のためのプログラムであるとされる。その内容は、基礎講座と実践講座Ⅰが各3日間、実践講座Ⅱが前期と後期で各3日間、最短2年間で延べ12日間（72時間）となっている。学習内容はライオンソン大学の養成内容と共通する部分も多いが、はるかに短時間であり、リタやマーサらが強調していた予防的な支援よりも問題対応型の内容である。今回はライオンソン大学の家庭支援職養成課程の紹介にとどめ、詳しい比較検討は次の機会に譲りたい。

わが国では「育児が楽しくない」という親が少なくないといわれている。楽しくない育児は他人にまかせたいということにもなる。他の国々に比べて、わが国では出産や子育ては個別家庭にとって経済的にも精神的にも負担が重く、しかも母親ひとりの責任が強調されがちであった。父親も母親も子育てを楽しいと感じるようになるには、子育て環境の整備など客観的条件を改善する必要があることも付け加えておきたい。

なお、本稿はトヨタ財団の助成研究「人権の尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て家庭支援システムの研究」（平成9年～平成11年）の一環として行った調査研究の成果の一部である。

参考文献・資料

- 1) パンフレット：Certificate in Family Supports With Specialization in Family Life Education or Family Resource Programmes, Ryerson Polytechnic University
- 2) ライオンソン大学要覧 (Ryerson Polytechnic University Annual Calender) 1998
- 3) テキスト：Certificate in Family Support, Specialization in Family Resource Programs, CVFS403, Family Support: Theory and Prac-

tice in Family Resource Programs Fall Session, 1998.

- 4) Irene Kyle and Maureen Kellerman, Case Studies of Canadian Family Resource Programs: Supporting Families, Children and Communities; Canadian Association of Family Resource Programs, 1998
- 5) Sharon L. Kagan and Bernice Weissbourd (Eds.), Putting Families First: America's Family Support Movement and the Challenge of Change, 1994, Jossey-Bass Publishers/San Francisco
- 6) 小出まみ「地域から生まれる支え合いの子育て」
ひとなる書房、1999
- 7) 子育て相談員教育プログラム開発研究委員会
(委員長・高橋利一)「子ども家庭相談員のための
研修の考え方とモデル研修プログラム」東京
都社会福祉協議会、1999
- 8) 中野由美子・土谷みち子編著「21世紀の親子支
援」ブレーン出版、1999